安田女子大学紀要　43，157-165　2015.

彫り進み木版画の授業に関する一考察

藤原　逸樹・菅川　雄二[1)]

Desirable Factors for a Successful, Step-by-step, Multi-colored Woodblock Print Class

Itsuki Fujiwara and Yuji Sugekawa

Abstract：This study considers important factors in offering a successful, step-by-step, multi-colored woodblock print class. The author considers this type of woodblock print class is difficult for elementary school students because they have to preplan what they carve and what colors they use in each stage. They cannot foresee what the results will be before they actually make the prints. For this study, the author was in charge of a 5th grade arts and crafts class titled “The Only Tree in the World—Express it by carving and coloring, step-by-step,” from planning to practice as a co-researcher. Then, the author analyzed the class from the viewpoint of what Wakamoto calls “Formative Art Environments,” which he claims are necessary conditions for successful art classes. In conclusion, the important factors to make such woodblock print classes fruitful is to present materials that let the elementary school students have rough ideas first and then create their original trees with abstract patterns, enjoying the incidental results of carving and coloring in each stage.

Key words: arts and crafts class, step-by-step multi-colored woodblock print, formative art environment

Ⅰ．は　じ　め　に

版に表す活動は，手についた泥を押しつけるような遊び，身辺材料や野菜などのスタンピング，ローラー遊び，紙版画，木版画など様々なものがあげられる。物の形が写る驚きは，子どもの興味を喚起させるものである。しかし，形をつくり絵の具をつけて刷るなど，素材に働きかけて写すという制約された条件は，活動によってはその難易度を高くしている。新関は，複数性，計画性，技術性をあげて版画の特性について述べている[2)]。

版に表す活動の教育的意義について振り返ってみる。例えば手に絵の具をつけて，指や手の跡をつけて楽しむ姿，木版画であれば，彫刻刀で丹念に彫り，絵の具をつけ，バレンでこすって紙をめくる時の感動的な姿などを思い浮かべることができる。版に表す活動は，児童が感じたこと

1）広島市教育委員会

2）新関伸也，「版画の教育的意義　版画の特性と教育における可能性」，『ベーシック造形技法－図画工作・美術の基　礎的表現と鑑賞－』，2006，pp.60-61

や想像したことなどをもとに，版をつくる，刷るといった行為を伴った表現の場としての役割を持っている。伊藤は，版をつくって写すという二重の感情の高揚と素材の抵抗を克服して内面の表出を図ることについて触れながら，版画の教育的意義について述べている[3)]。版に表す活動は，スタンピングで材料を扱う能力，彫刻刀やローラー等の用具を扱う能力，そして，彫り進めたり，刷り重ねたりする先を見通した構想力などを育むことができる。スタンピングをしたり，彫ったり刷ったりすることにより，形や色，行為との一体感の中で思いや願いを表すことに喜びを感じ，自己との対話のなかで内面を成長させていくのである。

彫り進み木版画は，彫って刷り，また彫って別のインクをつけて刷り重ねていく多色版画である。現行の教科書では，第5学年で示されているが，児童にとって製作過程が理解しにくく，作品の構想が難しいのではないだろうか。

Ⅱ．研 究 の 目 的

本研究の目的は，図画工作科の実践授業「世界に一つだけの木 ~彫り進めて表そう~」を「造形環境」の視点で検討し，児童にとって作品の構想が難しいと考えられる彫り進み木版画の授業がどうあるべきかを実践授業を基に考察することにある。

Ⅲ．研究の対象と方法

1．研究の対象

研究の対象とする授業の日時，対象学級，授業概要等は，次の学習指導案で示すことができる。本授業は題材の選定から学習指導案の立案，授業後の省察までを筆者が共同で行った。

<図画工作科学習指導案>

指導者　広島市立袋町小学校　菅川雄二教諭

1）日時・場所　2013年1月24日（木）第5校時 13:50~14:35 図工室

2）学年・学級　第5学年1組（男子18名 女子15名 計33名）

3）題材名　　世界に一つだけの木 ~彫り進めて表そう~（A表現（2））

4）題材について

○本学級の児童は，好奇心旺盛で，次々と思いをふくらませながら集中して取り組むことができる。しかし一方で，思いばかりが先行して，ていねいさを欠く児童や，集中力が長続きしない児童も見られる。

発想の段階では，表したいことをすぐに思いつく児童が多いが，中には，何をどのように表せばよいかわからず，発想することに時間がかかる児童，自分の発想に自信がもてず，教科書の掲示作品に似ているもので発想がとどまっている児童もいる。

技能面では，これまで，1年生のときから毎学年，版画の題材を経験してきている。4年生では，木版画の題材「世界に一つだけの花」に取り組み，彫刻刀の基本的な使い方を学習し，木版画による表現を経験している。彫刻刀の彫り味を味わい，また，刷った時の驚きやわくわくした

3）伊藤彌四夫，「版画表現の教育的意義」，『造形教育事典』1991，p.267

気持ちを経験しており，版で表すことへの意欲は高いといえる。しかし，木版画に関しては，まだ一つの題材しか経験しておらず，十分に技能が定着し，そのよさを味わうところまでは達していない。

鑑賞に関しては，友達の作品をみることをとても好み，よさを見付けることもできる。日頃から，図画工作科以外の学習活動においても，折に触れて，形や色に着目し，感じること気付くことなどをたずねるように声をかけてきた。しかし，よさや感じたことを具体的に表現することが難しい児童もおり，『きれい』，『かわいい』，『おもしろい』という抽象的な表現で終わってしまっている場面も見られる。

○本題材は，「世界に一つだけの木」を想像し，木版画で彫り進めながら，多色で刷り重ね表すものである。児童は，4年生の時，「よみがえる木のなかまたち」という題材で，剪定された自然木を使って作品を製作し，自然木とふれ合ってきている。また，5年生では，国語科で「森林のおくりもの」，音楽科で歌「木を植える」，社会科で「わたしたちの生活と森林」の学習をし，木について考える機会を多くもっている。そこで，「世界に一つだけの木を生やそう」と問いかけることで，自分が表したい木への思いをもち，また，児童一人一人が，木の形，実，花等を自由に発想し，のびのびと表現できると考える。さらに，数種類の色を用意し，色についても考えながら彫りと刷りを繰り返すことで，彫り進み木版画の仕組みがわかり，色の重なりの楽しさを味わうことができると考える。できた作品から自分の表した木にまつわる物語も作るようにし，友達同士で鑑賞し合うことで，友達の表現の面白さや工夫，込められた思い，創造性を認め合うことができると考える。

○指導にあたっては，まず，児童が彫り進み木版画の体験をし，仕組みを理解できるようにしておく。表現活動においては，「世界に一つだけの木」を想像し，その木についている実や花，色も考えることで想像力を十分に発揮することができると考える。その際，言語活動の充実を図り，アイデアスケッチをもとにグループで交流することで，お互いを認め合ったり，児童一人一人が想像を膨らませたりすることができると考える。次に，彫り進み木版画の活動の手順やポイントを確認し，見通しをもって活動できるようにしたい。さらに，彫る際には，用具を正しく安全に使うことや，彫刻刀の種類の選択，彫り方の工夫を確認し，児童一人一人が，木を思い思いに表せるように支援していきたい。場の設定も配慮し，児童が彫りや刷りを繰り返す際，活動しやすい環境を作っておきたい。最後には，自分が表した木にまつわる物語を作るようにし，木に込めた思いや工夫，発見を言葉によって表す活動も取り入れたい。そして，鑑賞の視点を示した鑑賞カードを活用し，お互いの作品を見合うことで，造形要素に基づいたお互いの表現のよさに気付くことができると考える。さらに，言語活動の充実を図りながらそれらを伝え合うことで，認め合い，造形要素に着目した作品の見方を深めていくことができると考える。

5）題材の目標

○自分なりの木を想像し，彫刻刀を適切に使い，色の重なりを味わいながら多色の木版画で表す。

6）題材の評価規準

ア 造形への関心・意欲・態度	イ 発想や構想の能力	ウ 創造的な技能	エ 鑑賞の能力
1　様々な彫刻刀を試しながら，想像した	自分が想像した木について自分の思い描い	彫刻刀や版画の特徴を生かしながら，彫刻	自他の作品について語ったり，友人と話し

木を表すことに取り組もうとしている。 2　自他の作品のよさや美しさを自分の思いをもって楽しもうとしている。	たイメージが表れるような形や色を考えている。	刀の違いによる彫り味の違いや色の重なりなど，表し方を工夫している。	合ったりしながら，表現の意図や特徴などをとらえている。

7）指導と評価の計画（全11時間）

時間	学習活動	学習活動における具体の評価規準等		
		評価規準 評価方法	十分満足できると 判断される状況	努力を要する 状況への手立て
第一次2時間	○彫り進み木版画を体験しよう。 ・小さく簡単な絵柄で彫り進み木版画を体験し，仕組みを理解する。	ウ 観察	・彫刻刀を正しく使い，彫刻刀の種類による表し方の違いや，色の重なり具合を理解している。	・絵柄にこだわらず，彫りと刷りを繰り返す時間を十分に確保する。
第二次　8時間　本時5/8	○「世界に一つだけの木」を彫り進み木版画で表そう。 ・「世界に一つだけの木」を想像し，彫刻刀の種類や彫り方，色彩を工夫しながら版画で表す。	アー1 イ ウ 観察 対話 作品	・「世界に一つだけの木」を表現することに関心をもち，想像を膨らませながら進んで取り組もうとしている。 ・いろいろな彫刻刀を使いながら，自分のイメージに合う表し方を具体的に考え，表現の見通しを立てている。 ・彫刻刀の使い方に慣れ，重ねて刷る特徴を生かしながら，表したいイメージに合わせて彫り方や色を工夫している。	・これまでの学習と関連付けた導入をし，表現意欲を高める。 ・アイデアスケッチを交流し合い，イメージを広げる。 ・たびたび彫刻刀の使い方を想起させたり，友人の表現方法が自然に取り入れられたりするように場を設定する。
第三次1時間	○作品を見合って，よさや工夫を伝え合おう。 ・作品を見合ったり，物語を読み合ったりして，よさや工夫を伝え合う。	アー2 エ 発言 ワークシート	・自他の作品を鑑賞し，彫り方や刷り方の工夫や形や色の面白さを感じ取っている。	・鑑賞の視点を示したワークシートを用意する。

8）本時の目標

自分のイメージに合うように，いろいろな彫刻刀を正しく使い，彫ったり刷ったりして自分の木を表す。

9）準備物

指導者	版画インク（黄・赤・オレンジ・青・紫）　練板　ローラー　新聞紙　刷り紙 バレン　乾燥棚　ぞうきん
児童	版画作業板　彫刻刀　歯ブラシ　版木　下絵

10）本時の展開

学習活動	○教師の支援 ★努力を要する児童への支援	評価規準 評価方法
1　本時の学習内容をつかむ。		ウ 作品 観察
めあて　自分のイメージに合うように，いろいろな彫刻刀を使って工夫して彫ったり，色を考えて刷ったりしよう。		
2　本時の見通しをもち，用具の使い方などの確認をする。	○自分の活動目標を決め，見通しをもって取り組むことができるようにする。 ★活動の手順や用具の使い方など，具体的な視点を与える。	
3　自分のイメージに合うように，工夫して表現をする。 【主な活動】 ・一色目の色（黄色）が残るように彫り進める。（彫り） ・赤かオレンジかを選んで二色目の重ね刷りをする。（刷り） ・彫り足りないところがあればさらに彫り進め，刷る。	○いろいろな種類の彫刻刀を使うように声をかけたり，児童が彫りと刷りを繰り返しやすいような学習環境を設定したりする。 ★下がきをもとに，児童の思いを引き出し，具体的な活動につながるような提案や助言を行う。	
4　学習のふりかえりをする。	○本時の活動のふりかえりと，次時の活動の見通しがもてるようにする。	

2. 研究の方法

若元は，図画工作科のよい授業を構築する要件と考えられる「造形環境」の視点を提案して論じている[4)]。本研究では，この理論を援用して実践授業を考察していきたい。「造形環境」とは，大きく「可視環境」と「不可視環境」の二つである。一つ目の「可視環境」では，①場の環境，②材料環境，③用具環境をあげ，二つ目の「不可視環境」では，①人的環境，②時間環境，③情報環境をあげている。「不可視環境」は，目に見える具体的なものというよりも「雰囲気」とい

表1　造形環境検討票[5)]

	観察観点			メリット	デメリット
保証すべき造形環境	可視環境	場の環境			
		材料環境			
		用具環境			
	不可視環境	人的環境	教師		
			仲間		
			保護者		
		時間環境			
		情報環境			

4）若元澄男，「造形遊びとその環境要件について」，『学校教育実践研究』第1巻，1995，pp.143-154
5）同上論文，p.146

った曖昧性のある，しかし極めて重要な環境として捉えられる。若元は，授業においてこれらを記録し，検討するために「造形環境検討票」として示している。

若元は情報環境として，「題材名」「材料・用具の活用法」「技術・技法」「教師の発問」「クラスメートや保護者のコメント」など無形のものをあげ，不可視環境として論じている[6)]。「板書」は目に見える形で児童に示されるが，本研究では不可視環境の中の情報環境の範疇として考察していきたい。

Ⅳ. 結 果 と 考 察

1.「造形環境」に照らした結果と考察

<場の環境>

本授業が行われたのは通常の図工室であった。これは，場の環境として適切であったと考えられる。なぜなら活動に適した広さを持ち，活動しやすい机や椅子があり，版木に付いたインクを落とす洗い場があり，そして授業者が刷り専用の十分なスペースを設けていたからである。公開授業であった本授業は約30名の参観者がいたが，図工室が狭く感じることはなかった。彫りと刷りを繰り返す本授業は，机で彫り，移動してローラーのコーナーでインクをつけ，さらに移動してバレンで擦るコーナーで写し取り，作品乾燥棚で乾燥させるという動線もよく考えられていた。

<材料環境>

本授業で使用された版木の大きさは約36×26㎝で，児童が思いを表現するのに適したものであった。版画専用に開発された版木は，表面が淡い青色で塗装されており，彫ると板の生地の色が出るため，彫った所，彫っていない所が判別できるものであった。版画インクは，水性の5色が準備され，黄，赤またはオレンジ，青または紫の順で刷り重ねていくよう示されていた。これは，教師の試作により，発色，色の組み合わせを考えて選定した5色である。明度の高いものから低い順に刷り重ねて行くよう示されていた。本授業は黄に赤またはオレンジを刷り重ねていく段階であった。図1 ～ 4は，最後の青を刷り重ねた完成作である。黄，赤またはオレンジ，青または紫の順での刷り重ねが適切であったことがうかがえる。今後の課題としては，他の色の組み合わせを取り入れた作品を示し，児童が組み合わせを考える授業をつくることがあげられる。刷り紙はインクの乗りがよく発色のよいしっかりとした紙質のものであった。彫り進み木版画は，工程を後戻りしてやり直すことができない。刷り重ねを失敗したときのために，第一段階の黄を2枚刷っていた。

<用具環境>

本授業で準備された用具は，彫刻刀，版画作業板，歯ブラシ，新聞紙，練板，ローラー，見当紙，バレン，乾燥棚などである。彫刻刀は第4学年で購入，あるいは自宅にあったものである。児童の活動から，いずれも切れ味のよいものであることが判った。版画作業板は，版木よりも大きく安定していて使いやすいものであった。歯ブラシは，彫りかすを取り去るためのちょうどよい用具として使用していた。ローラーはきめの細かい上質のゴムでインクの乗りのよいものが準備されていた。見当紙は枠を書いた画用紙をインクが付いても拭き取れば何度も使えるようにラ

6）若元澄男，「図画工作科における造形環境に関する一考察」，『美術教育学』:美術科教育学会誌（16），1995，pp.353-363

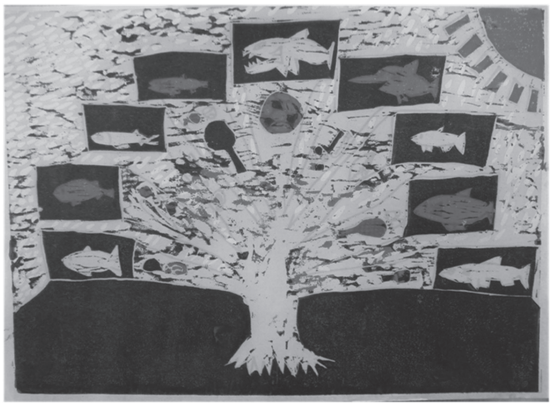

図1　児童作品「ぼくの夢の世界」

図2　児童作品
「世界一のコーヒー」

図3　児童作品
「おばけの世界で一つだけの木」

図4　児童作品「天使の木」

ミネート加工したものであった。

<教師>

授業者は児童の活動を支援できるよう，前掛と腕貫をしていた。授業者の説明や発問は簡潔に分かりやすいものであった。すかっとした印象の言葉は授業に爽やかな雰囲気を醸し出していた。

<仲間>

導入時では，授業者の発問に多くの児童が応答していた。教室全体の雰囲気はよく，日頃の学級経営のよさがうかがえた。製作時では，全ての児童の集中して取り組む姿が見られた。また，

版木や用具の片づけ，掃除は声をかけ合って協力して手際よく行うことができていた。

<保護者>

若元は，保護者も重要な「造形環境」の一つとしてあげている。本授業においては，保護者による児童への直接的なかかわりが確認されたわけではない。ただ，児童の準備物である彫刻刀と歯ブラシは，家庭から持ってきたものであるので，保護者のかかわりがあったと想像できる。彫刻刀は，第4学年での版画の授業の際，購入あるいは，家庭にあったものを使用している。今回も同様であった。歯ブラシも，家庭にあったものを選んで持ってきている。ここに保護者の支援があったと考えられる。

<時間環境>

往々にして説明の時間が長くなり，製作時間が足らなくなるといった授業に出会うことがある。体育の授業であれば，運動量が確保されていること，音楽の授業であれば演奏の時間が確保されていることが肝要である。同様に，図画工作の授業は，かきたい，つくりたいという児童の表現欲求を満たす時間が必要である。本授業は製作時間が十分確保されていた。これは，製作時間を確保することも意図しながら，教師の説明が簡潔に分かりやすく5分以内の導入にまとめられた形でなされたからである。

<情報環境>

「題材名」は，「世界に一つだけの木 ~彫り進めて表そう~ 」であった。ストレートな言葉は，どのような活動を求められているのか児童にとって分かりやすいものであった。しかし，「世界に一つだけの・・・」というフレーズはよく使われてきたものであり，児童をわくわくさせ表現欲求をかきたてるものであっただろうか。漠然としたイメージが具体的ではっきりとしたものになり，それぞれの木に対する思いや願いを込めて児童が表現していくことができるような題材名が必要である。

「板書」は，よく計画されていた。題材名，本時のねらい，製作過程（彫りと刷りの手順）や注意事項が分かりやすく示されていた。

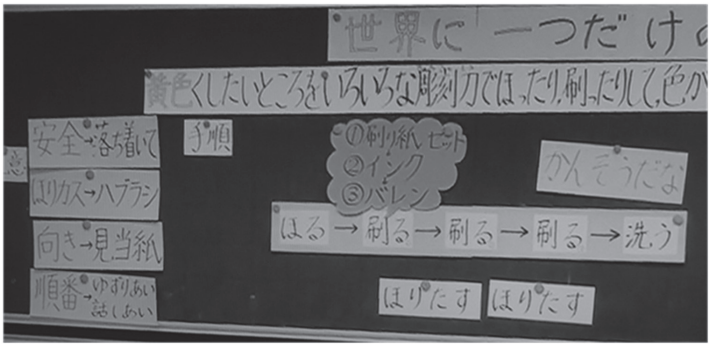

図5　板書

2. 総合考察

本研究は，図画工作科のよい授業を構築する要件と考えられる「造形環境」の視点で実践授業を分析した。授業はそれぞれの児童が作品に向かって挑む意欲的な姿の見られるものであった。「造形環境」の具体である材料環境，用具環境，人的環境，時間環境，情報環境の視点で分析した結果，よい授業が実現した多くの要因を示すことができた。版画は，インクを付けて写すときのわくわく感がある。本研究で考察した授業は，数色を刷り重ねていく面白さがあり，版画の醍醐味を十分味わうことのできる活動であった。一方，大きな課題も浮かび上がってきた。これは情報環境の視点と，題材を設定する上での題材観に関わる大きな視点からの考察である。彫り進

み木版画は，彫って刷り，また彫って別のインクをつけて刷り重ねていく多色版画である。児童にとってどのように製作していくのかという製作過程が理解しにくく，作品の構想が難しい。実践授業は，「彫る」→「刷る」→「彫り足す」→「刷る」→「彫り足す」→「刷る」といった彫り進み木版画の手順を分かりやすく示していたが，イメージ通りの作品に結びついていたとは言い難い。彫って刷り，また彫って別のインクをつけて刷り重ねる活動は，大人でもその経験がなければ作品の見通しが立てにくい。児童においては，なおさらであろう。彫り進み木版画は，刷ってみないと分からない製作過程での偶然性がある。すなわち，最終的な作品をイメージして構想を練っても彫り進み木版画の経験のない児童には見通しを立てにくいのが現実であり，「こんな色になるとは分からなかった」というリアクションは多くの児童が感じたことであろう。ある程度の構想を基に，彫りと刷りの偶然性や意外性を楽しみながら製作していくことに主眼を置く題材がよいと考える。独創的な木を抽象的な模様づくりで表現していく題材が考案できるのではないだろうか。

〔2014. 9. 25 受理〕